
『たまにはこんな非日常』

いぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『たまにはこんな非日常』

【Nコード】

N7417S

【作者名】

いぬ

【あらすじ】

キヨーンと朝比奈さんののんびりまったり空間

(前書き)

のんびりまったりです

平日の放課後。

曇った空。灰色の雲。

今にも雨が降ってきそうで、やっぱり降ってこない中途半端な空模様。

そんな空を見て何を思うでもなく、俺は今日も部室棟へ向かう。慣れとは恐ろしいものだ。特に意識していなくても足が勝手に動いてしまう。そんな自分に溜め息をつき、部室の前に着いた俺はいつも通りにノックをする。

中から聞こえる「はい」という声に僅かに頬が緩む。

ああ、そうか。俺はこの声を聞きたいから飽きることもなくこの部室に足を運ぶのか。とても思っていないとやってられないね。

ドアを開け中に入ると、そこには最早部室のマスコットと化したメイドさん。もとい、朝比奈さんだけがいた。

「朝比奈さん、今日も早いですね」

俺の挨拶に「お仕事ですから」と、冗談とも本気とも取れる返答をする朝比奈さん。

いや、本気か？

まさかこの可愛らしいお方は本気でメイドさんを目指しているんじゃないだろうな？

有り得ない話ではないところが恐ろしい。

不意に頭に浮かんだ未来の朝比奈さんが「それは禁則事項です」と悪戯っぽく微笑むのに俺は親指を立てて応えた。

グッジョブ。

グッジョブです朝比奈さん。

そんな俺の脳内会議などいざ知らず。どっからかちよげてきたパイプイスに腰掛けた俺に朝比奈さんは甲斐甲斐しくお茶を注いでくれた。

湯気と共に立ち上る緑茶の香り。いつもより近い顔に少し心拍数が上がる。

「熱いから気を付けて下さいね」

さり気ない気遣いが俺の心まで温めてくれる。ありがたしありがたし。せめて何かお礼でも出来ればいいが。

朝比奈さんいつもありがとうございます。お礼に今度は俺が朝比奈さんを温めてあげますよ？

言えるワケがない。犯罪だ。朝比奈さんなら意味も分からずに了承してしまいそうで恐ろしい。いや、待てよ。了承される。つまり同意の上。だとしたら…… オールオツケー？

「今日は涼宮さんはご一緒じゃあないんですか？」

瞬間。我に帰る。

危ない危ない。もう少しで梱包してお持ち帰りしてしまうところだった。いやそれよりも。朝比奈さんは俺がハルヒと一緒にやないのがそんなに不思議ですか？ 俺だってアイツの保護者じゃないんですからいつも一緒なんかではありませんよ？

「ハルヒならブツブツ言いながらチョコクの粉にまみれてますよ」

掃除当番をサボろうとしたのがバレて阪中に黒板消しの粉落としをさせられていることだろうよ。いつも俺に押し付けていた天罰だ。甘んじて受けるがいいのさ。

「うふっ、それじゃあしばらくはキョン君と二人きりですね」

……グッジョブです朝比奈さん！

特に意識しての言葉ではなかるうとも、俺はそのセリフと笑顔があればご飯三杯はいけますよ。むしろ、ご馳走様です。いつそ、いただいちまおうか？

いやいやいやいやいやいや。

朝比奈さんにそんなことは出来ない。断じて出来ない。

このまま朝比奈さんを見ていたら本当にお持ち帰りしてしまいそうなのがしたので、さり気なくを装い目を逸らし部室内を見渡すように眺める。

ハルヒがコンピ研から強奪したパソコン。長門お気に入りの本棚。古泉の持ってきたボードゲーム……。

ここが何をする部屋なのかがさっぱり分からないくらいカオスな品々。その中で一際存在理由が分からない、朝比奈さんが今まで着させられたコスチューム群。

色んな意味できわどすぎる赤バニー。不必要なまでに丈の短いナース服。カラフルなチアガール。バイトで使ったカエルの着ぐるみ。トラウマしか残さなかった戦うウェイトレスに鶴屋さんとお揃いのメイドウェイトレス。後は犬騒動の時の巫女さん。

よくもまあ、ハルヒもこれだけ集めたものだ。これだけあればちよつとしたファッションショーが開けそうである。勿論、モデルは朝比奈さんだ。

「いっぱい着ちゃいましたよね」

俺が朝比奈さんの衣装を眺めていたのが気になったのだろう。少し恥ずかしそうにしている。その姿がなんとも保護欲をそそるので、思わず抱きついてしまいそうになるのを理性の皮一枚のところで踏みとどまる。

よし、よく堪えた。よくやった俺。

そうやって安堵していたからだろう。朝比奈さんの「キョン君はこの中のどれが好かったですか？」との質問に、普段なら絶対に言わないようなクサイセリフを言ってしまった。

「俺はこの衣装のどれよりも、今の朝比奈さんが一番好きですよ」と。

途端。真っ赤に茹で上がる朝比奈さんに釣られ、俺も体温が上昇するのを感じた。

アホか！ アホなのか俺はッ！ 古泉じゃあるまいし！ 何を言

ってんだよ俺はッ！！

朝比奈さんは「ありがとうございます……」と消え入りそうな声でお礼を言うが、俺は見ていられなくなり、顔を背ける。なんともどかしい空気。しばしの間は俺のお茶を啜る音だけが静かな部屋に流れていた。

「……」

「……」

沈黙の空間。

しかしそれは決して重苦しいものではない。

「……」

「……」

例えるなら森の中。

森林浴にも似た静謐な空間。

「……」

「……」

顔を向ける。

目が合った。

どちらともなく、微笑んだ。

「お茶。淹れますね」

いつの間にかカラになっていた湯のみにお茶を注ぐ朝比奈さん。

一度目よりも近い顔。

手を伸ばせば届く距離。

だけど俺は、そんなことはしない。

首を捻り、ドアを見る。

それは、日常という名のドア。

それが開けば、ハルヒが、長門が、古泉が入って来て今まで通り

の“日常”が始まる。

それが“幸せ”であることを、俺は知っている。

だけど、たまにはこんな“非日常”もいいかも知れない。

だからさ、もう少し。いいだろ？

なあ、ハルヒ？

開かないドア。

湯気の立つ湯のみ。

微笑む横顔。

全てが優しいその人の淹れてくれたお茶は、やっぱり俺の心まで
温めてくれたのだった。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7417s/>

『たまにはこんな非日常』

2011年4月25日20時57分発行